

路上生活者の個人史

第2回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのは松田氏(仮名)である。私が大阪でホームレス支援の仲間になって、7年になる。食料などの支援に並ぶ人たちの中に松田さんがいた。40歳前後のホームレスは少ない。私たちの支援のお馴染みになっているホームレスは、たいていが70歳代である。60歳までの人は仕事と住むところを見つけて自立できる。ボランティアの助力を借りたりして仕事と住居を得て、ホームレスから脱していく。「ホームレスはそんな暮らしがしたい人たちだ」という人があるが、一夜でもいいから冬の寒空の下で寝てみてほしい。誰が好きこのんで冬の寒空で寝るものか、と私は思う。こうした状況の中で、松田さんはどんな思いなのだろうと思っていた。

松田 悠氏(仮名) 1975年生まれ。

生まれは、京都です。ずっと同じ所で育ったわけではありません。京都、兵庫、大阪と転々としました。戸籍はありません。離婚後300日以内の出生は、元の夫を父親とする、というような法律があるじゃないですか。だから、お袋は私を産んだとき、離婚直後だったので出生届を出さなかったのです。出生届を出すと、血がつながっていない人が父親になるじゃないですか。出生届を出さなかったので私の戸籍はないのです。住民票だけは作ってくれました。

小学校は兵庫県で行きました。中学、高校は大阪です。おもに、事実上の父親の親戚宅でした。父親は無責任な人で、私をつくって消えたそうです。その人の親戚の家で育ててもらったのです。その家族の転勤であちこち転居しました。大学は中退です。というか、除籍です。2年生までは、頑張ってアルバイトして、お金を稼いで行きました。アルバイトばかりで、大学の授業にはほとんど出ていませんでした。もちろんお金も足りませんでした。なんかその大学の授業料を払いたくなかったので

す。授業料を払わなかったら、大学から除籍といわれました。もちろん学費を出してくれる人はいませんでした。母親は、事情があつて私とは離れた関係でした。

この前の給付金の10万円ですか？
いや、もらいませんでした。戸籍がないからもらえません。ホームレス支援者の人から、戸籍をつくる手助けをしてくれると言ってもらったのですが、そんな気持ちになれなかったのです。確かに、10万円は私にとって大きいお金です。とっても大きいお金ですから、私もほしいですよ。しかし、自分に関して知りたくない事が分かるのが嫌なのです。そんなこと知るなら、10万円は諦めようと思いました。ものごころつく前のことで聞いた話ですが、私の母親は私を連れて東尋坊に行ったそうです。私を海に投げ込んで、あとから自分も飛び込もうとしたらしいです。私を育てられないので、そうしようと思ったらしいです。しかし、連れて帰ってくれました。そして、私は事実上の父親の親戚で養ってもらって、この家庭から小学校と中学校に通わせてもらいました。子どもの頃は、友だ

ちになると人の家庭の事情とかを聞いてくるじゃないですか。それを尋ねられるのがいやで、友だちを作らないようにしていました。自分に近づくなという空気を周囲に出していたと思います。

中学校を卒業して、高校生の一時期は母親と姉と暮らしていました。姉が二人いるのですが、上の姉はずいぶんと歳が離れているので接点もありませんでした。だから、どこでどうしているのかも知りません。それに姉二人と私の三人は、父親がみんな違うのです。下の姉は、一緒に暮らした時期もありましたが、性格も違いますからうまく暮らせませんでした。

二十歳の時に、大学を辞めて、というより除籍になって、働き始めました。働くといっても、派遣や日雇いの仕事をしていました。どこかに就職という考えはありませんでした。現実的には、それまでの大学に行かないでバイト生活というのと変わりませんでした。派遣や日雇いの仕事は気楽ですから。気楽というのは、私が自分のことを言わなくてもいいということです。雇う方も、私が怪我なん

かしても知らないふりができますからいいのかもしれませんが。実際に大きな怪我はしませんでした。そんなに頑張っって仕事をしませんから、怪我もしなかったのです。頑張らない仕事は、どれも長続きしません。寮があると嬉しいですが、仕事を辞めると寮も出ないといけません。だから、住む所も転々としていました。時には、付き合った女の子の所に転がり込んだりしていました。でも、やっぱり長続きはしません。住むところがあれば、私が働かないのです。働けといわれて、出て行くことになりました。

派遣や日雇いの仕事で熟練を求められませんし、仕事のスキルが上がるわけでもありません。頑張っても同じなのです。仕事が減れば来なくていいということで、スキルは求められていないのです。仕事を頑張るより、目立たないようにしている方がいいのです。こんなことをいうのは、私の言い訳かも知れません。実際に頑張っている人もいるのも知っています。でも、頑張っている人がそれなりの結果を得ているわけでもありません。もちろんおいしい結果を求

めるより、人間としてのやりがいかもしれません。私はいい加減な人間ですから、そんなに頑張らないのです。

東日本の震災の頃から、路上生活をするようになりました。35歳ぐらいだったと思います。路上生活といっても、繁華街だと24時間営業のお店もありましたのでそれなりに居場所がありました。洗濯するところもありますし、清潔な服装をしていれば、あまり追い出されることもないです。私は酒もたばこも吸いませんし、ギャンブルもしませんからほとんどお金が要らないのです。何か欲しいものもある訳でもないで、ほんとうにお金が要らないのです。女の子に対しても、いいなと思っても見ているだけです。自分から積極的にはいかないです。望まなければ要らないです。人間は頑張っって生きないとダメなんだろうけど、頑張っっても仕方がないだろうと思うようになったのです。そんなことで、今、こうしているのです。

35歳って、そういえばそうですね、確かに母親が死んだ頃です。